

---

# 僕らが飛べる日

ふさふさしっぽ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕らが飛べる日

### 【Nコード】

N9433Y

### 【作者名】

ふさふさしっぱ

### 【あらすじ】

主人公砂宮梨華は、ドジも多いが明るくさっぱりした中三の女の子。ある日をきっかけに、不思議な力を持った三人の男子と秘密を共有することになる。たまにバトルありの、ちよっと不思議系の予定です。

## 夜の学校で（前書き）

連載テスト小説です。いきあたりばったりだったり、へんな箇所で切ったりしちゃうかもです。っていうか主人公がイケメンに囲まれる系の話です^^途中で恋愛したり、バトツたり、シリアスになったりします。

いろいろ「なにこれ」てきなことはあると思いますが、目をつぶってやってください。

## 夜の学校で

夜の学校は怖い。

部活動に委員会も終わって、職員会議も終了して、校門が閉ざされる。見回りも兼ねた宿直員がいることはいるが、それでもやっぱり怖い。あまりの静けさが、昼の騒々しさと対称的だからだろうか。どこになにが潜んでいるか、分からないからだろうか。

この物語の主人公、砂宮梨華さみやりかは、その怖い怖い夜の学校にいた。お決まりの、宿題の忘れ物を取りに来た、という理由で。12月の夜は寒い。とくに今日は寒い気がする、と梨華は思った。梨華は白い息を吐きながら、静まり返った廊下を進む。

「なんでわたしが数学のプリントのことで、ここまでしなきゃならないの!？」

心の中で梨華は逆切れしていた。梨華は数学が苦手で大っ嫌いだった。だからってべつに、他の科目が特に得意という事もないけれど。

梨華は3年2組の教室にたどりつくと、明りをつけ、数学の宿題プリントを白い息をはきながら急いで探した。もはや心の中は怖い、寒い、やっつけられないの三重苦状態だった。

そしてようやくプリントを見つけ、ほっと一息。

そのときなんとなく窓の外に違和感を感じて、梨華は窓の方を見た。向き合った校舎の真っ暗な窓が並ぶ。その中に、なぜかオレンジ色の窓が見えた。

燃えている！

窓から見える向こう側の校舎、ここと同じ3階に位置するある教室が、なんと火をあげて燃えていた。火の手は教室を覆い尽くすほどではないが、大きな焚火ほどの炎があがっている！「ウソでしょ！」梨華はパニックになった。逃げるか、でも放つといたら大変なことになる。そうだ、宿直室にいこう！梨華は教室を飛び出した。目の前に影があった。

「！！」

「ぎゃああー！！」

梨華は影にぶつかり、影を下にしたまま倒れこんだ。ちなみに「！！」は、影の方のリアクションで、「ぎゃああー！！」というみっともない叫び声は、梨華のものである。

我にかえった梨華が顔を上げると、そこには見知らぬ男の顔があった。暗くてよく分からないが、まったく覚えがない顔だった。男は黙ったまま、こちらを見ている。

「ふんずけて、ごめんなさい」

梨華は彼を押し倒すような格好ですつころんでいたのだった。あわてて起き上る。男の方も無言で立ち上がった。そして、

「どうかしたの？そんなにあわてて」

初めて言葉を発した。

## 消えた

「どうしたのって……そう、火事よ火事！」

梨華は明りがついていている教室の中を指さし、

「ほら！あそこの窓から見えるでしょ！」と言いながら男を教室の窓付近まで引っ張っていった。

「火事？どこ？」

まったくのほほんとした男の態度に焦れながらも、梨華はもう一度向かいの教室を見る。

「ほら、あそこに……って、あれ？」

なにもなかった。火事のかの字も。そこから見えるのは、真っ暗な中に浮かぶ向こう側の校舎、何の変哲もない教室の室内。

「あれれ？」

梨華は目を丸くした。確かにさっき、教室内一帯に「うごう」と燃え上がる炎を、この目で見たはずだ。

それがきれいさっぱりなくなっている。

「うそよ、たしかに」

梨華がそう言って振り向いた先には、誰もいなかった。

梨華が自宅まで猛ダッシュしたのは言うまでもない。

途中廊下で滑って転び、下駄箱の傘立てに躓いて転び、家の門に焦って激突した。けれど一度たりとも後ろを見なかった。とにかく家に帰ることだけを考え、爆走した。

「なにあれなにあれなにあれ！」

なかなか開かないドアにイラつきながら、梨華は押し寄せてくる恐怖を抑えきれなかった。

さっきまであった火事が消えた。

さっきまでいた人間が、音も立てずに消えた。

かちつ。

やっと鍵が回り、ドアが開いた。梨華は家の中に飛び込むと、そこに。

「おかえり〜」

この世の不幸をすべて背負った妖怪のような女が立っていた。顔は血まみれで、髪は重力を完全に無視している。

「ぎゃあああー!!」

梨華はまた間拔けな悲鳴をあげた。

## 画家の予言

「ちょっとなにこの世の不幸が全て襲いかかって来た、みたいな声だしてんのよ」

「お母さん……どしたのその顔」

顔面血まみれ、逆立つ髪の毛、まるで幽霊のようなこの女は、梨華の母、菜月である。

菜月は、見るからにやつれ、目にはくつきりと隈を作っていたが、どうやらご機嫌のようである。体が振り子のように左右へ揺れている。菜月がご機嫌である、という証しだ。そして菜月がご機嫌なきというのは、たいてい、

「聞いて梨華、ついに完成したのよ！」

「完成したって、この前から描いてる血だまりの絵？」

「失礼ね。あの絵は明日への予感と期待、をあらわしているのよ」  
「たいてい、自分の描いている油絵が、いい感じに出来上がったときだった。ああ、あの顔面の赤いのは油絵の具か、と梨華は心の中で納得した。」

梨華の母、菜月は一部には名の知れた女性画家である。主に抽象画を描き、ダイナミックで大胆な色遣い、まったく意味不明な構図のなかに、不思議なメッセージ性を感じると評されている。

菜月は揺れながらこう続けた。

「今回の絵はあんたに関係している絵よ。なにかが始まる、いや、さつき仕上げる瞬間、もう始まっている、と感じたわ。あんた気をつけなさい」

そう梨華に注意しつつも、菜月本人は絵が仕上がった喜びに、ゆるら酔いしれていた。梨華は呆れ顔で靴を脱ぐ。

「わたしに何ががはじまる？彼氏でもできんのかな」

梨華はそう菜月に問いかけたが、菜月は口笛を軽快に吹きながら左右に揺れつつ回転しはじめ、なにもきいちゃいなかった。梨華は



あきらめ、放っておくことにした。母の変人ぶりは今に始まったことじゃない。

「だけどわたしに関係しているなにかがもう始まっている、って気になるな」

梨華は2階に上がろうとしてふと足をとめた。

菜月は絵を描くことで、何かを予言する力をもっていた。梨華が小さいころからそうだった。梨華はいつも絵を描く母親の後ろ姿を見ていた。母曰く、絵を描いている最中は、崇高な意志というか、天啓のようなものを心にかけているらしいので、話しかけてはいけないと常々言われていた。だから小さいころの梨華は、絵を描く菜月の背中ををただじっとみつめているだけだった。

菜月の予言は何らかの形で必ず当たる。ただ予言が具体的ではない場合が多いので、予言された方も対処のしように困る。

梨華は菜月の予言をぶつぶつ反芻しながら、はたと、気付いた。

「わたし、なんか忘れてない？」そして、10秒ほど静止したのち、  
「そうよ、学校！火事！消えた！男！！」

叫んで振り返ったが、菜月は、

「あんたあんなに急いで帰ってくるなんて、よっぽどお腹減ってたのね」

まだ玄関付近で揺れていた。

「絵描くのに集中してて、晩御飯のことすっかり忘れてたわ。ピザトーストでも焼きましょ」

## 魔法使い？

「ちよつとおかーさん、ピザトーストとか言ってる場合じゃないって！わたし、変なもの見ちゃった！ってかお母さんの予言当たってるのかも」

午後9時。梨華と菜月は向かい合ってテーブルにつき、夕飯のピザトーストをかじっていた。辺りにはほのかにチーズの匂い。

「で？」

菜月が3枚目のピザトーストを頬張りながら、梨華に問うた。菜月はもう揺れてはいなかった。

「でって、今話したとおりよ」

梨華がかじったピザトーストのチーズが、びよんと糸を引く。

「わたし、ぜつたい、燃え盛る炎をみたの！こっ、竜巻みたいにごおーってね！窓の向こう、3号棟の3階よ。今思えば、あれはたしか視聴覚室よ」

菜月は4枚目のトーストを食べ終えた。

「いきなりぶつかって来た男は、振り返った瞬間、もういないの！わたし寸前まで袖をつかんでいたのに。おかしいでしょ？火事が消え、男が消えて。これってお母さんの予言となにか関係があるんじゃないの？」

梨華の話は多少オーバーに脚色されている上、梨華と男が互いにぶつかったはずなのに、男の方が一方的にぶつかってきたという改ざんがなされていた。けれど菜月がそれに気付くはずはなく、彼女は梨華がしゃべりまくっている間、計5枚のトーストを平らげて、最後に手についたパンかすをなにげなく払うと、お腹一杯で満足というような、とろんとした目でぼつりと言った。

「きつとその男は魔法使いかなにかなのよ。炎を自在にあやつり、

瞬間移動する」

「はあ！？ハリーポッターに影響されてない！？真面目な話なんだけど！」

「ごめん。眠くなった。もう9時過ぎだし。ごちそうさま」

「え！？うそ！ー！やば、数学のプリントやってない！」

「寝よ寝よ……」

こうして梨華のまこと不思議な夜は、終わろうとしていた。一人アトリエ兼寝室にとっとと籠ってしまった菜月の代わりに後片付けをして、梨華も仕方なく2階へとあがる。

梨華は自室で数学のプリントとにらみ合いながらも、まだ未練がましく、ほんの数時間前に体験した出来事を思い返していた。

「わたしの見間違い、じゃ、絶対ないよなあ……」

（魔法使いかなにかなのよ）

「そんなばかな」

数学のプリントは半分くらいしか埋まらなかった。ので、あとの半分は委員長に見せてもらうことにして、梨華はもやもやした晴れない気持ちのまま、眠りについた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9433y/>

---

僕らが飛べる日

2011年12月7日06時54分発行